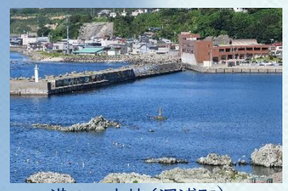
北前船寄港地として栄えた鰺ヶ沢町・深浦町・野辺地町は、日本遺産「荒波を越えた男たちの紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落」の認定を受け５周年の節目を迎えました。そして北前船寄港地として栄えた青森市も、まもなく青森港開港から４００年の節目を迎えようとしています。これらの港町には、日本各地を結んだ北前船が伝えた様々な歴史や文化が、時を越えて今もなお受け継がれています。

このフォーラムでは、北前船研究者と各市町で北前船の活用に取り組む文化財担当者が集まり、「北前船でつながる」をキーワードに各地の歴史や文化を紹介しながらその魅力と可能性を皆さんと一緒に探っていきます。

【復元北前型弁才船「みちのく丸」野辺地町所有】

白八幡宮絵馬群（鰺ヶ沢町）


港の一本杭（深浦町）

野辺地の山車行事（野辺地町）

香取神社の狛犬（青森市）

江戸時代中頃から明治時代までの約１５０年間にわたり、北海道と大阪を行き来した「北前船」。この船は、客から預かった荷物を運ぶ「賃積み」のほか、船主が寄港地で商品の売り買いをする「買い積み」をしていたことから、「海のデパート・総合商社」と言われています。

北前船は、寄港地に日用品や各地の特産品を運ぶだけではなく、祭りや食の文化も運びました。人や物が集まって交流したことで、各地の寄港地には独特の歴史や文化が育まれました。

青森県内にも北前船の寄港地があり、そのうちの鰺ヶ沢町・深浦町・野辺地町は、日本遺産「北前船寄港地・船主集落」に認定されており、この３町では様々な連携事業を行っています。

３町による連携事業（３港めぐりスタンプラリー・キッズツアー）

鰺ヶ沢町

鰺ヶ沢港の歴史は、中世までさかのぼるとされています。江戸時代になると鰺ヶ沢港は、弘前藩の米を大阪へ積み出す御用港として重要視されました。弘前城下に最も近い海の玄関口として、江戸・明治時代にかけて多くの北前船が入港し隆盛を極めました。

港には藩の米蔵や町奉行所が置かれ、荷上げ場のあった本町を中心に多数の船問屋が軒を連ねていました。

町内には北前船で運ばれた石造物や文化が残されており、「白八幡宮大祭」は、京都の祇園祭の流れをくむことから「津軽の京祭り」とも呼ばれています。

津軽の京祭り･白八幡宮大祭

円覚寺奉納船絵馬と髷額

深浦町

深浦港は中世以来、蝦夷地往来のための風待ち港として栄えました。

暴風の際は避難のため、逆に風がない時は順風を待つ港として、海を越える船乗りにとって重要な役割を果たしていました。港周辺には、港に入る船乗りを相手にする船問屋や小宿が並び、町は北前船の入港によって繁栄しました。

円覚寺には北前船の船乗りが航海安全の祈りを込めて奉納した船絵馬や髷額が数多く残されており、国内最古の船絵馬も見ることができます。

野辺地町

野辺地港は、南部盛岡藩の御用港として発展しました。江戸時代になると多くの北前船が南部盛岡藩の北の玄関口である野辺地港を訪れるようになります。また、尾去沢銅山の銅や、領内の大豆、〆粕（魚肥）が野辺地港から大阪へ積み出され、港には藩内や各寄港地の特産品が取次されるようになり、港町として大きく発展しました。

町内には北前船で運ばれた石造物や、「カワラケツメイの茶がゆ」といった食文化が残されています。

浜町の常夜燈

絵葉書（築港海岸） 1920～1930 年代

青森市

青森港は１７世紀の初め、江戸への米の積み出し拠点として弘前藩庁が新たな町づくりを始めたことにその出発が求められます。一方、この地に根を張った商人たちはこうしたいわば「公的ルート」とは別に、日本海・瀬戸内海域の北前船主や諸商人とも取引関係を結んでいたことが、石造物などから確認できます。

さらに、蝦夷地（北海道）への渡航地として青森港の有用性が中央政府に認められたことで、近代以降はその玄関口、さらには対ロシアを見据えた貿易港として整備され成長しました。